

第1章 計画の概要

1 計画の作成

- (1) 計画の作成年月日
令和8年(2026年)3月31日
- (2) 計画作成者
札幌市
- (3) 保存活用計画の名称
重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存活用計画

2 文化財の名称等

- (1) 重要文化財(建造物)の名称及び所在地
 - 1) 名称及び員数

旧札幌農学校演武場(時計台)	1棟
附 時計・自鳴器械	1式
 - 2) 指定年月日及び指定書番号
昭和45年(1970年)6月17日(文部省告示第228号)
 - 3) 所在地
北海道札幌市中央区北一条西二丁目1番地の1
- (2) 重要文化財(建造物)の構造及び形式
木造、建築面積384.5㎡(※)、二階建、亜鉛引鉄板葺、正面玄関及び時計台付
附 時計・自鳴器械 一式
※重要文化財指定時の建築面積は387.4㎡。平成7～10年保存修理工事における現状変更(便所撤去)により、建築面積変更。
- (3) 所有者の名称及び所在地
 - 1) 名称
札幌市(市民文化局 文化部)
 - 2) 所在地
北海道札幌市中央区北一条西二丁目

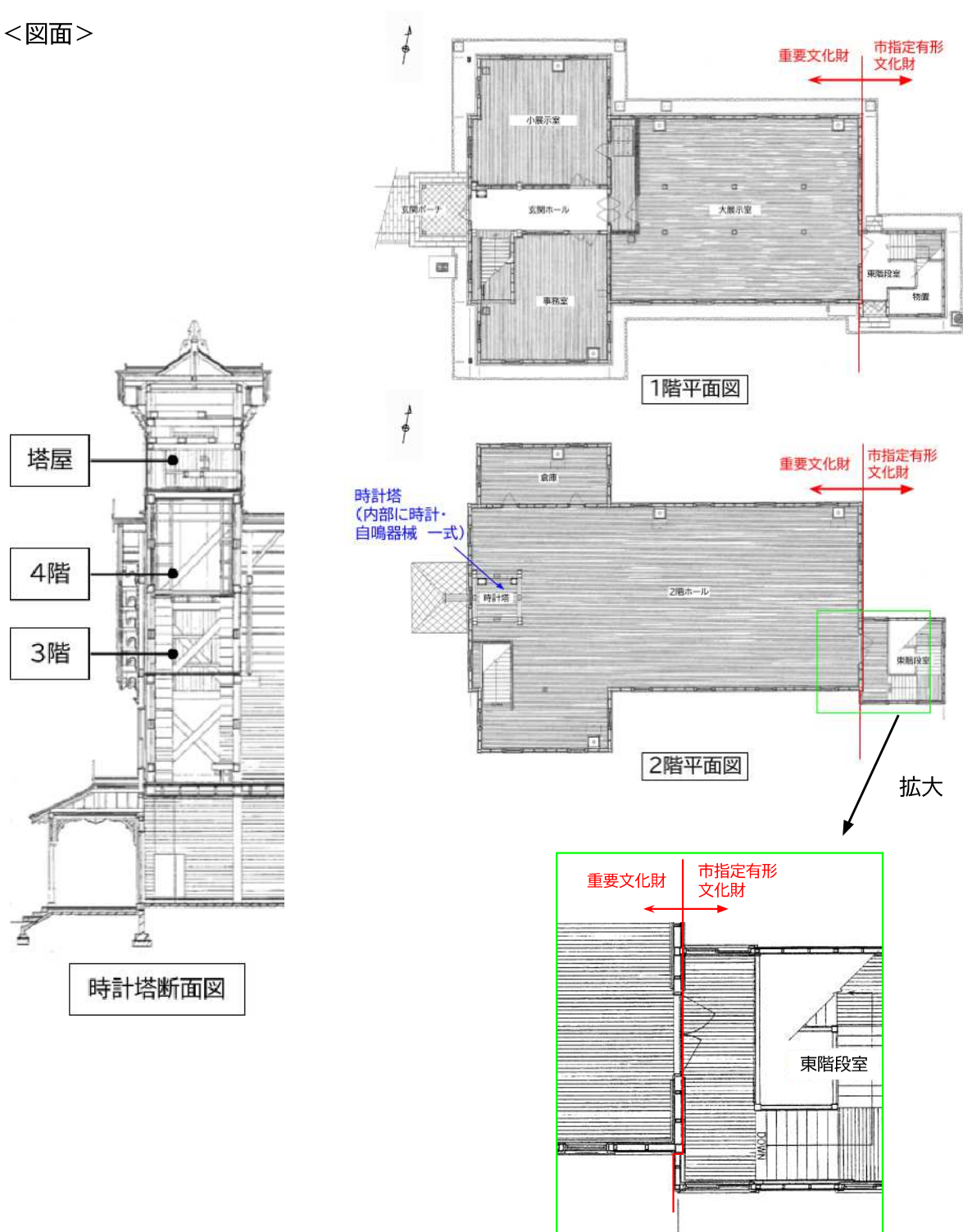
3 文化財の概要

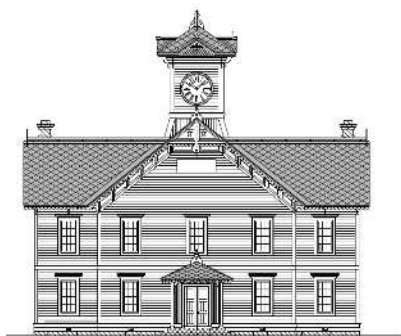
(1) 文化財の構成

旧札幌農学校演武場(時計台)(以下時計台(重文)という。)は、木造二階建、正面玄関及び時計塔付の建築面積384.5㎡の建造物であり、時計・自鳴器械一式が附指定となっている。また、背面東西の南よりにとりつく東階段に取り付く東階段室は重要文化財の指定範囲外となっており、市指定有形文化財に指定されている。

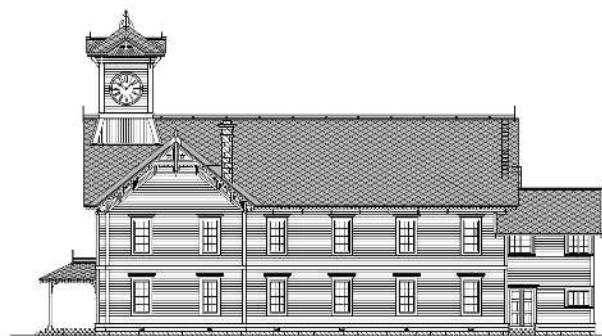
以下に、平成7～10年の保存修理工事竣工時点での図面、及び現状の写真を掲載する。時計・自鳴器械一式は下図で示した時計塔の中に設置されている。

<図面>

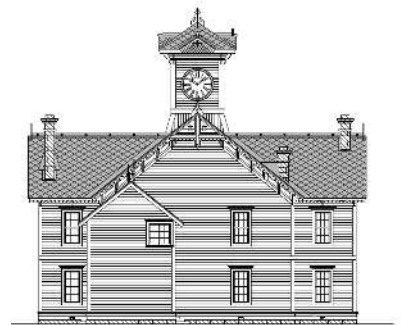




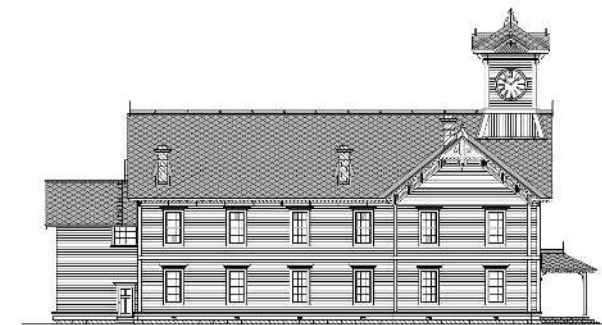
西側立面図(正面)



南側立面図(側面)



東側立面図(背面)



北側立面図(側面)

<写真>



正面(西側)外観



側面(南側)外観



背面(東側)外観



側面(北側)外観



時計・自鳴器械一式(附指定)

(2) 文化財の立地環境

時計台(重文)は、札幌市の中心部に位置しており、国道12号と市道西3丁目線の交差点の北東角に正面を西に向けて建つ。

現在、時計台の周辺には、大通公園やさっぽろテレビ塔をはじめとした観光施設が多く、札幌市営地下鉄大通駅やJR札幌駅からも徒歩圏内であることから、来訪者が周遊しやすい立地環境となっている。

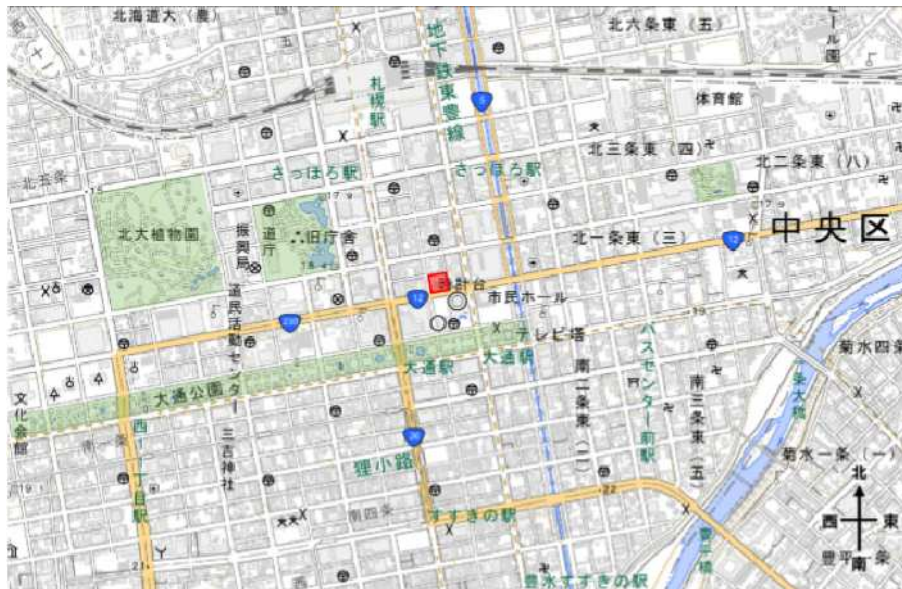


図1 位置図/出典:国土地理院地図

(3) 文化財の創立沿革

1) 時計台の建築まで

明治初期、明治政府が札幌本府の開設に取り掛かる頃、札幌農学校開校前の当該地は、図2. 明治元年札幌市地図によると大部分が茅野であった。開校直前の図3. 明治八年札幌市街図は、札幌農学校建設地に「札幌学校」の記載がある。これは、明治5年に東京に設けられた開拓使仮学校(札幌農学校の前身で、道内の農工業その他を興すために設けられた学校)が、明治8年に札幌に移り「札幌学校」と改称したものである。図4. 明治11年北海道札幌之図では、「札幌学校」だった土地に「農学校」の記載があるが、「演武場」の建物の記載はない。



図2 明治元年札幌市地図(北海道立図書館所蔵)/出典:「北海道史<付録地図>」大正7年 北海道発行
図の右手が北。中央を横断する「用水」は大友堀(創成川)。建物は、豊平川の右岸・左岸に志村鉄一と吉田茂八の家が描かれているのみで、大部分が茅野である。図中の赤丸は札幌農学校開校前の当該地周辺を示す。

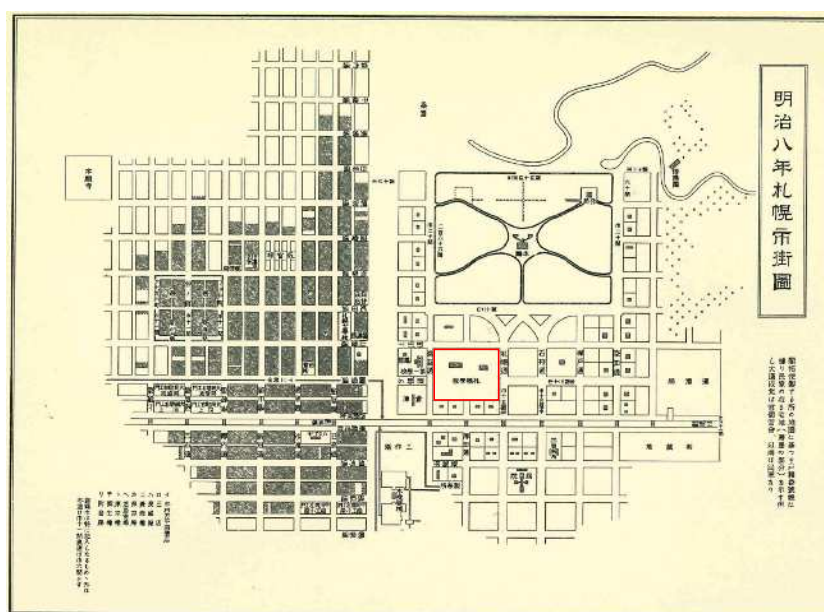


図3 明治八年札幌市街図/出典:「北海道史<付録地図>」大正7年北海道発行
(図は「さっぽろ文庫・別冊 札幌歴史地図<明治編>(札幌市教育委員会編)」より引用)
図の右手が北。札幌農学校建設地に「札幌学校」の記載がある。



図4 明治11年北海道札幌之図/北海道大学附属図書館所蔵
 (図は「さっぽろ文庫・別冊 札幌歴史地図＜明治編＞(札幌市教育委員会編)」より引用)
 図の上が北。図には「農学校」の記載がある。演武場の建物の記載はない。
 図中の赤枠は当時の札幌農学校の敷地を示す。

2) 建設から札幌農学校の移転まで(明治11年(1878年)～明治36年(1903年))

時計台は、札幌農学校(北海道大学の前身で明治9年(1876年)8月に日本最初の高等農業教育機関として開校)の校舎の一棟として明治11年に建設され、同年10月16日に開業式が挙行された。現在では「時計台」として、札幌の象徴となっていることは周知のとおりであるが、竣工の時点では「時計台」と称される所以である時計塔は設置されておらず、屋根上に小振りの切妻屋根の塔屋(鐘楼)を載せているだけであった。時計塔(時計機械)が設置されたのは建設から3年を経た明治14年(1881年)になってからである(写真1・2)。

時計台の建設構想は、明治10年(1877年)9月20日、札幌農学校教師としてアメリカ合衆国より招かれていた、W・ホイラーの提言によって始まる。当初の構想では、煉瓦造の二階建てで塔屋を備えた「本館」(一階は、臨時には成業式・夜宴・演説に用い、平常時には弁論・博物学科等の講堂として利用する正堂、地質および鉱物の展覧場、動物および勸業の展覧場などを配し、二階には、園芸および樹木等の博物場、展示品-剥製・標本-作成のための製作室、土木機械測量理学および図学等に使用する部屋、書籍を収納する文庫を置く)と、木造で平家建の「練武館」(練兵館)の建設を要望したものであった。しかし、理由は明確でないが二棟の建設実施は困難とされたようで、ホイラーはこれを一棟に集約して、明治11年1月2日に略平面図と建築仕様の概説を作成し、開拓使にこれを提出した。その後、同年6月18日に着工し、同年10月16日に開業式を挙行している。ホイラーの描いた略平面図や建築仕様の概要は、現在の時計台にほぼ踏襲されているが、実施設計にあたる作業は開拓使工業局営繕課が行ったものといわれており、豊平館などの建設にも関与していたとされる安達喜幸も関わっていたと考えられている。この時点では時計塔は未設置であり、屋根上に小振りの切妻屋根の塔屋(鐘楼)があるのみであった。

竣工から3年後の明治14年に塔屋を廃して時計塔を建ち上げたことは、多くの文書等により明らかになっているが、工事の着手と完了の時期は史料により記述が異なり、正確な月日は現在も不明である。時計機械については、明治14年7月に設置され、同年8月12日に調整が完了し時計機械の稼働を開始している。明治初期の札幌において、この時計台の鐘の音は市民にとって貴重な時報であり、明治21年(1888年)には、札幌の標準時計に指定され、その重要性はさらに高まった。

札幌農学校時代の時計台は、1階は主に講義室、博物標本室、図書閲覧室として使用された。特に博物教室や動植物学教室が置かれ、学生たちの教育研究の場となっていた。2階は、当初の計画通り兵式訓練や体育の授業に使われたほか、入学式、卒業式、学位授与式、祝賀会、著名人による講演会などが開催される中央講堂としての役割を担った(写真4・5)。



写真1 明治12年札幌農学校全景
(北海道大学附属図書館所蔵)
時計台に時計塔はまだ設置されていない。

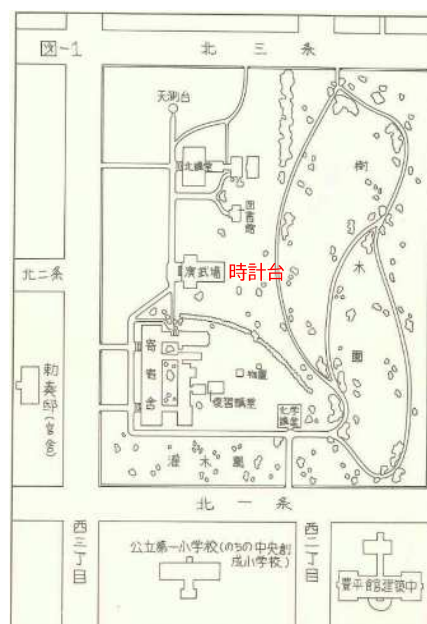


図5 明治13年の札幌農学校配置図(図の上が北)/
出典:「さっぽろ文庫6 時計台」札幌市教育委員会編



写真2 明治22年以後/時計塔が設置された時計台
(北海道大学附属図書館所蔵)

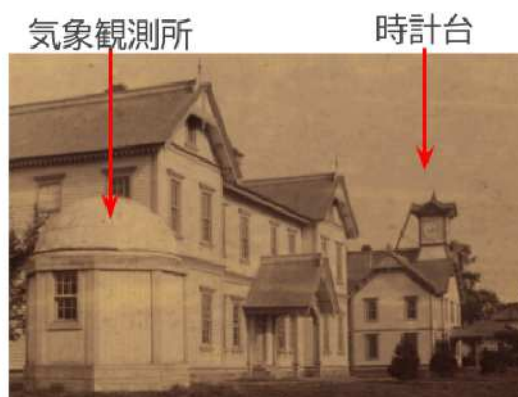


写真3 明治23年頃/時計台と気象観測所
(北海道大学附属図書館所蔵)
気象観測所は明治12年11月、北講堂の北側に建てられ明治14年から正確な時刻を市民に知らせた。



写真4 明治27年3月/明治天皇銀婚の祝賀会
(北海道大学附属図書館所蔵)



写真5 明治32年6月/佐藤、宮部、南教授学位授与祝賀会
(北海道大学附属図書館所蔵)

3) 札幌農学校の移転から重要文化財指定まで(明治36年(1903年)～昭和45年(1970年))

教育内容の充実と学生数の増加に伴い、明治30年代に入ると札幌農学校は施設の拡充と移転計画が具体化した。明治36年9月、札幌農学校は現在の北海道大学札幌キャンパスの地(当時札幌区北8条以北)へ主要施設を移転した。この移転に伴い、時計台は農学校の施設としての役割を終えることとなった。

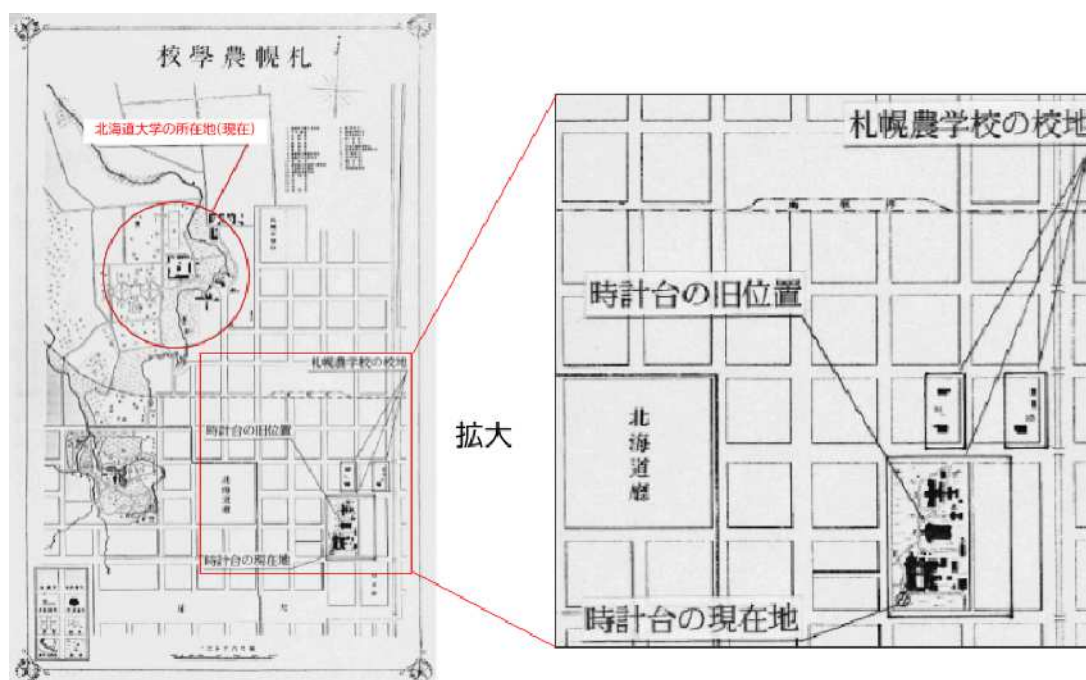


図6 図の上が北。出典:「覆刻 札幌農学校」北海道大学出版会
(明治31年(1898年)6月26日発行、明治35年(1902年)改版。昭和50年復刻発行。図は明治35年(1902年)に増補されたものに説明を加えたもの。)

札幌農学校の移転後、時計台の建物と土地は当時の札幌区が借用することになり、この借用期間を経て、明治39年(1906年)には札幌区が時計台を買収し、道路整備のため、現在の位置に曳家により移築された。上図6に示されるとおり、元は現在地の約100m北東、北二条西二丁目の札幌農学校旧構内ほぼ中央に建てられていた。

時計台は、明治40年(1907年)に、札幌郵便局局舎の焼失に伴い一時的に郵便局として使用され、明治44年(1911年)には、北海道教育会が附属図書館を開設し、1階を閲覧室、2階を集会場として利用された。2階の集会場では、各種講演や市民講座、演奏会等が催され、広く市民に利用される施設となった。大正7年(1918年)には札幌区教育会が附属図書館を引き継ぎ、大正15年(1926年)には、札幌市が土地を取得している。

札幌市教育会の創立25周年にあたる昭和6年(1931年)には、記念事業として時計台の改修が企画され、昭和8年(1933年)に費用6,500円(うち、2,500円は札幌市教育会が市内の教職員などから募り市に寄付)で改修が行われた。なお、この改修の前年である昭和7年(1932年)12月に、当時の市政を二分する議論であった発電事業の公営化問題(詳細は「さっぽろ文庫37札幌事件簿」札幌市教育委員会編のp142-144参照)の財源として時計台の敷地売却、取り壊し案が一時的に出たが、札幌市教育会により、明治天皇の聖蹟としての永久保存と修築が陳情された。昭和8年の改修は札幌市がこれに応じる形で行われたものである。(※以下の3つの新聞記事の内容を元に記載。①昭和7年12月21日付小樽新聞朝刊「由緒ふかき時計台/電業案の犠牲に/売られる敷地/教育会保存に協議」、②昭和7年12月25日付小樽新聞朝刊「時計台を護れの声に/あわてゝ打消し/保存に一万円の予算を要求/力づく教育会」、③昭和8年4月25日付北海タイムス朝刊「取り壊しの運命から/懐しき時計台を守る/遂ひに市を動かして…」)

昭和8年には明治天皇の行在所、御小休所、行幸所を明治天皇聖蹟に指定する動きが全国的

に広がった。これに伴い、明治14年9月1日に明治天皇が行幸された時計台も明治天皇聖蹟として、「史蹟名勝天然記念物保存法」に準じた扱いを受けることとなり、昭和9年(1934年)には、札幌市教育会の主唱で明治天皇の行幸を記念した聖蹟碑が建立された。太平洋戦争中には寺院の鐘などの金属類が供出されたが、時計台は同法に準じた扱いを受けていたことにより、鐘の供出を免れた。

また、昭和8年には、市内で時計店を営んでいた井上清氏による時計機械保守の無償奉仕が始まる。きっかけは、同年3月に時計塔の明かり取りの小窓(昭和42年に撤去)のガラスが破れているのを発見し、時計機械が錆びることを心配した井上氏が市に手入りを申し出たことである。これ以降、井上清氏とその息子である和雄氏により時計機械の保守は担われ、現在は札幌市時計台時計機械保存会へと技術伝承され今も当初機構を維持して稼働し続けている。

戦時体制下の時計台は、昭和18年(1943年)に陸軍通信隊の施設として接收され図書館は閉鎖された。昭和20～23年(1945～1948年)の戦後の混乱期には、札幌市教育会事務局、北海道商工経済会、商工組合中央会北海道支部、鉄鋼協会、能率協会、北海道教職員組合が入居した。札幌市は、時計台を図書館として利用するため、地方自治法の規定に基づき、入居している諸団体に対し昭和23年6月30日を期限として明け渡し請求を行った。昭和24年(1949年)に時計台の受け渡しを受けた市は改修を行い、昭和25年(1950年)5月11日に市立札幌図書館として開館した。



写真6 市立札幌図書館時代の様子(左:入館待ちの行列、中央:1階、右:2階)

その後、昭和36年(1961年)6月7日に札幌市指定有形文化財に指定された。昭和37年(1962年)に時計台移転論^{※1}が展開されたが、昭和41年(1966年)に、市議会で現地での永久保存が決議された。なお、昭和38年(1963年)には、札幌市民憲章が制定され、その前文で「わたしたちは、時計台の鐘が鳴る札幌の市民です」と謳われており、時計台が、札幌市民にとって象徴的な存在であり続けてきたことが伺える。

昭和42年(1967年)は市立図書館の移転を契機として、時計塔を建ち上げた明治14年当時の姿を再現することを目標とした復原工事が実施され、昭和43年(1968年)からは2階を「時計台資料室」として公開した(写真7)。国指定重要文化財に指定されたのは、昭和45年6月17日である。



写真7 時計台資料室時代の様子
(出典:札幌市時計台HP)

4) 重要文化財指定から現在まで

昭和45年6月17日に重要文化財に指定された時計台では、昭和51年(1976年)には国庫補助事業として屋根葺替・塗装・部分修理が実施された。これに合わせ、2階の展示のありかたに検討が加えられ、同年12月8日に札幌歴史館として2階のみ暫定的に開館。1階の展示整備や建物周囲の整備も進められ、昭和53年(1978年)1月25日に全館が「札幌歴史館」として全面オープンし、札幌の歴史を紹介する施設として、平成7年(1995年)から始まる保存修理工事直前までの期間使用された(写真8)。



写真8 札幌歴史館の様子(左:1階、右:2階)

平成7年からは、耐震診断及び耐震補強工事を含む大規模な保存修理工事が行われ、工事完了後の平成10年(1998年)には「札幌市時計台」として再開館した。再開館にあたっては、「重要文化財としての価値を保存・継承しつつ、市民や観光客に広く公開し、その歴史と魅力に触れてもらう」ことを活用の基本方針に、新たな整備が行われた。1階は、時計台の歴史や札幌農学校との関わりなどを紹介する資料展示室として整備された。ここでは、札幌農学校演武場としての創建から現在に至るまでの詳細な歴史、ウィリアム・ホイラー教頭らによる建設計画、度重なる修理や保存運動の経緯などが、豊富な写真、図面、解説パネル、関連する実物資料(実際に使われていた建築部材の一部や屋根の飾り、修復時に用いられた道具など)などを用いて多角的に紹介されている。また、映像資料による解説も行われ、来館者の理解を深める工夫がなされている。ボランティアガイドによる定時案内や、求めに応じた解説も行われ、より深い学びの機会を提供している。2階部分は、明治32年(1899年)の佐藤・宮部・南教授学位授与祝賀会(写真5)を参考にして、札幌農学校時代の講堂の雰囲気再現したホールとして公開されている。このホールは、夜間には貸しホールとして、その歴史的空間を活かした多様な利活用が図られており、昼間とは異なる時計台の魅力を提供している。音響効果にも優れていることから、クラシック音楽のコンサート等の音楽イベントが定期的に行われている。他にも講演会、セミナー、朗読会、市民団体による研究発表会や文化活動の発表の場としても利用される。これらの利用は、時計台の歴史的価値を損なわない範囲で許可されており、市民が文化に親しむ場、あるいは特別な体験をする場として機能している。



写真9 現在の活用の様子

(左:1階大展示室、中央:2階ホール、右(出典:札幌市時計台HP):貸しホール利用の様子)

附指定である「時計・自鳴器械 一式」については、その文化的価値が高く評価されており、平成8年(1996年)に、環境庁による「残したい“日本の音風景100選”」に時計台の鐘の音が選定されている。この鐘の音は、敷地内に設置されたマイクを通して、昭和50年(1975年)4月から、札幌テレビ放送株式会社のラジオ(現・STVラジオ)で生の時報として現在に至るまで利用されている(「札幌テレビ放送 50年の歩み(札幌テレビ放送創立50周年記念事業推進室 編)」をもとに記載)。また、平成21年(2009年)8月には、時計機構部分が「札幌市時計台の時計装置」として日本機械学会の機械遺産に認定された。設置当初の時計機構(米国ボストン市のハワード商会製)が現在も稼働しているという点で塔時計^{※2}(機構部)としては国内現存最古であること、また、時計機構は工業製品における国産品と外国製品の融合事例草創期のもので現在まで適切に維持・管理されていることなどが評価されての認定となった。

歴史的価値の継承にくわえ、未来に向けた新たな役割も担い始めており、札幌市が令和2年(2020年)に宣言した「ゼロカーボンシティ」の実現を見据え、市有施設の使用電力を再生可能エネルギー100%に切り替える事業の検討を進めており、その先駆けとして令和3年(2021年)4月から、ライトアップを含めた時計台で使用する電力を全て再生可能エネルギー由来の電力(北海道内のJクレジット購入による)に切り替えた。国内外の多くの方々に札幌市のシンボルである時計台に関心を持ってもらい、その文化・歴史に触れるきっかけの一助とするために実現した取組で、北海道内の重要文化財施設としては初めての取組である。

※1 時計台移転論について

時計台の現地保存か移転かの論議については、これまで再三にわたり市民論議や議会等で取り上げられてきた経緯がある。古くは昭和35年(1960年)の中央地区市政懇談会での質疑がある。時計台周辺のビル化が目立つ昭和37年頃から時計台移転論が出始め、昭和40年(1965年)に市立図書館の新築が確定したことをきっかけに論議がピークに達した。この論議は現地保存と移転保存の二つに割れたが、最終的には昭和41年12月9日に臨時市議会に「札幌市文化財時計台の永久保存に関する意見書」が提出され、市議会は現地での永久保存を決議している。

昭和45年に重要文化財に指定されてからも同様の論議が起こっている。昭和54年(1979年)には第3回定例市議会において、時計台の保存のあり方について質疑があり、当時の桂教育長は、現在地が札幌農学校の跡地であることから現状保存が適当であると答弁している。

平成4年には重要文化財指定後初めての大規模な修理工事に着手すべく準備を進め、合わせて時計台の活用や周辺環境の整備について市民論議を喚起した。その結果、「良好な環境へ移築して保存すべきという意見と、明治39年の曳家がいったといえ、旧札幌農学校の敷地内に留まっているという歴史性を重視した現地保存」を主張する意見が交錯し、十分な議論を行う時間が必要となった。そのため着手を延期し、市民論議に1年を費やして、市政モニター調査(平成4年6月)、文化財保護審議会(平成4年7月)、パネルディスカッション(平成4年8月)、時計台市民懇談会(平成4年10月～平成5年1月)を行った。これらの市民論議を受けて、最終的に札幌市は現地保存の方針を固め、平成5年(1993年)6月11日の定例市議会総務委員会において、現地保存を正式表明し了承された。

※2 時計台の塔時計について

正式名称を「時打重錘振子式四面時計(ときうちじゅうすいふりこしきよんめんとけい)」という。時計塔には東西南北4面に文字盤と時計針が取り付けられている。今なお正確に時を刻んでおり、毎正時には時刻の数だけ鐘が鳴る。時計機械はおもり(重錘)が重力で下がる力だけを動力源としている。時計を動かすための「運針用」のおもり(約50kg)と、鐘を鳴らすための「打鐘用」のおもり(約150kg)の2種類のおもりがあり、ワイヤーで吊り下げられたこれらのおもりがゆっくりと降下することで、時計機械の歯車や振子を動かしている。

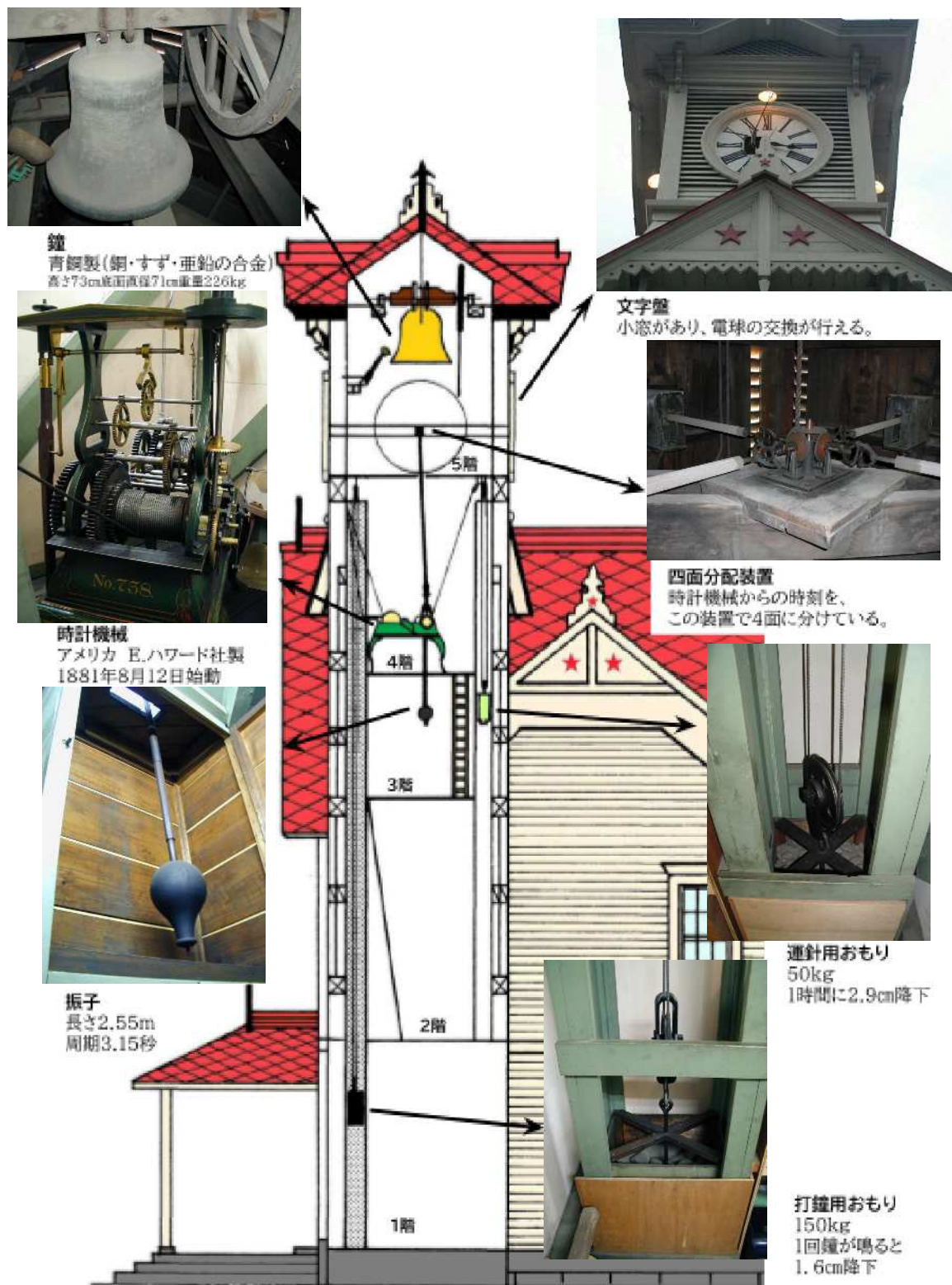


図7 塔時計の仕組み

表1 時計台の沿革

和暦	西暦	月	出来事
明治10	1877	9	札幌農学校教師としてアメリカ合衆国より招かれていたW・ホイラーより建設構想の提言
明治11	1878	1	W・ホイラーが略平面と建築仕様書の概説を開拓使に提出
		5	演武場建設許可の決裁が下る
		6	着工
		10	開業式を挙行
明治14	1881		塔屋を廃して時計塔を建ち上げる
明治21	1888		札幌の標準時計に指定される
明治36	1903	7	札幌農学校が現在の北海道大学の位置へ移転、時計台の建物と土地を札幌区が借用
明治39	1906		札幌区が建物を買収、北2条通の敷設にともない現在地に曳家・移築
明治40	1907		郵便局が建物を使用(～明治43年(1910年))
明治44	1911		北海道教育会が建物を使用、付属図書館を運営
大正12	1923		高階哲夫が「時計台の鐘」を作詞作曲
大正15	1926		札幌市が土地を取得
昭和18	1943		陸軍通信隊の施設として接收。図書館閉鎖
昭和20 ～	1945 ～		戦後の混乱期に、札幌市教育会事務局、北海道商工経済会、商工組合中央会北海道支部、鉄鋼協会、能率協会、北海道教職員組合など各種団体が入居
昭和25	1950	5	明渡し請求後、市立札幌図書館として使用開始
昭和36	1961	6	札幌市指定有形文化財に指定
昭和37	1962		時計台移転論(現地保存か移転保存か)がおこる。
昭和38	1963		札幌市民憲章制定。前文で「わたしたちは、時計台の鐘が鳴る札幌の市民です」と謳われる。
昭和41	1966		時計台の移転論について、市議会が現地での永久保存を決議(同様の議論は昭和33年(1958年)・昭和37年にも交わされてきた)
昭和42	1967		市立札幌図書館が移転、明治14年の姿に復原工事
昭和43	1968	7	2階を「時計台資料室」として公開、1階は札幌文化団体協議会、札幌市教育研究協議会などが順次使用
昭和45	1970	6	重要文化財に指定
昭和51	1976		国庫補助事業として屋根葺替・外壁塗装・部分修理、ルーフヒーティングを設置
		12	2階のみを「札幌歴史館」として暫定的に開館
昭和53	1978	1	全館が札幌歴史館となる
平成7	1995		保存修理工事(耐震診断・耐震補強工事を含む)を実施
平成8	1996		環境庁が時計台の鐘を「残したい”日本の音風景100選”」に選定
平成10	1998		「札幌市時計台」として再開館。2階ホールの貸し出し利用を開始。
平成21	2009	8	「札幌市時計台の時計装置」が(一社)日本機械学会の機械遺産(第32号)として認定
令和3	2021	4	ライトアップを含めた時計台における使用電力全てを再生可能エネルギー由来の電力(北海道内のJクレジット購入による)に切り替え

＜時計台の呼称の変遷＞

時計台は、時代とともに建物の呼称が変化しており、その変遷は次の表のとおりとなっている。

明治14年の時点で「時計台」という言葉が見られ始め、昭和8年8月14日の座談会「時計台を語る」での発言も踏まえると、「時計台」が通称となったのは明治後期頃からと考えられる。

表2 時計台の呼称の変遷

和暦	西暦	月日	史料中の呼称	出典、史料の概要、備考
明治10	1877	9月20日	練武館・練兵館	『北大百年史札幌農学校史料(一)』 P307 ・本館と練武館の2棟建設を提言 ・練武館と練兵館が文書中に混在
明治11	1878	1月2日	演武場 (Military Hall) ・ 操練場 (Drill Hall)	『北大百年史札幌農学校史料(一)』 P329 ・ホイラーの建築仕様の概説 ・平面図の2階ホール部屋名も Military Hallだが、概説では同じ 部屋をDrill Hall(操練場)としてい る
		1月8日	演武場	『八十周年記念誌』P87 ・農学校から上局に宛てた、明治11年度 予算による新築についての伺書
		3月30日	演武所	『明治十一年 庁外 文移録(往)甲部 一月ヨリ 農学校』 ・農学校から上局に宛てた、建築費用見 積金額についての報告文
		6月26日	演武所	『八十周年記念誌』P95 ・農学校から上局に宛てた、鐘の製作 (鑄造)費用見積金額についての報告 文
		10月13日	演武場	『北大百年史札幌農学校史料(一)』 P372 ・10月16日の開業式式次第文書
		10月25日	許大造営家屋	『北大百年史札幌農学校史料(一)』 P382 ・ホイラーが書いた時計注文書
		11月11日	演武場	『北大百年史札幌農学校史料(一)』 P382 ・札幌書記官から東京書記官へ、在米 日本公使館が時計注文を取り計らう よう依頼した文書
明治12	1879	9月15日	演武場	『八十周年記念誌』P95 ・時計差し戻しの可能性を伝え、豊平館 に設置する場合に必要な金額を返答 するように東京から札幌に指示した 文書
		9月27日	演武場	『八十周年記念誌』P95

和暦	西暦	月日	史料中の呼称	出典、史料の概要、備考
				・時計の豊平館設置に要する費用を農学校から上局へ報告した電報
		10月6日	演武場	『八十周年記念誌』P96 ・時計の豊平館設置費用見直し結果報告、返品・譲渡に関する農学校から上局への照会文書
		10月8日	巨大ナル已造ノ家屋	『北大百年史札幌農学校史料(一)』P449 ・時計機械の注文違い問責に対するホイラーの弁明書に引用されている時計機械の注文書の文面
明治14	1881		演武場	『開拓使事業報告 第四編 運輸 通信 衛生 教育』P414
			(農学校)時計台	『開拓使事業報告 土木』P711
明治18	1885		演武場	『北大百年史札幌農学校史料(一)』P779
明治31頃	1898頃		中央講堂	『札幌農学校』(明治31年6月26日刊行)
明治36	1903	7月21日	旧演武場	第22回札幌区会議事録
明治39	1906	7月26日	旧演武場 同場据付時計	第40回札幌区会議事録
明治44	1911		時計台	『八十周年記念誌』P89 「北海の教育第127号」より
昭和8	1933	8月14日	演武場 (農学校の)大時計 時計台	座談会「時計台を語る」より (『修築記念誌』に所収) ・星野勇三氏(明治34年札幌農学校卒業)談:記者からの「演武場は後に中央講堂と改称されていますが、いつ頃からだったのでしょうか」の質問に答えて、「演武場という名は最後まで残っていた。」 ・阿由葉宗三郎氏(明治15年より札幌市在住)談:ここの大時計は、明治34～35年頃まで「農学校の大時計」と呼ばれていて、新聞でも種々の文章でもそう書いてありました。今の様に「時計台」と呼ばれる様になったのは、もっと後の事でしょう。」 ・このほか、佐藤昌介氏、宮部金吾氏(明治14年札幌農学校卒業、北大名誉教授)も「大時計」と発言。

＜時計台の部屋名の変遷＞

時計台は、時代とともに部屋名が変化しており、その変遷は次の表のとおりとなっている。

表中に整理した以外に、札幌農学校卒業者による各種座談会等での発言による通称なども明らかになっているが、ここでは書面・図面に記された部屋名のみを整理した。また、一時的に入居した団体の入居場所については整理していない。

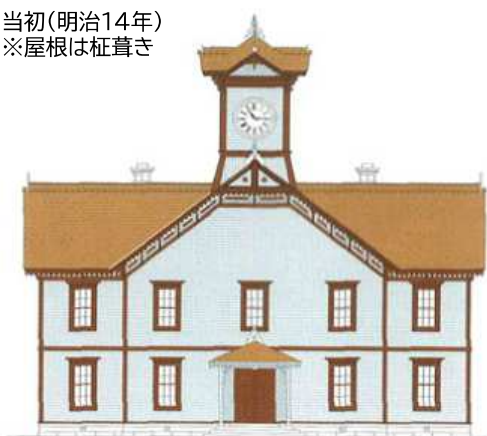
なお、表中で「現在の名称」としたのは、昭和53年1月25日に「札幌歴史館」が全館オープンして以降現在も用いられている名称である。

表3 時計台の部屋名の変遷

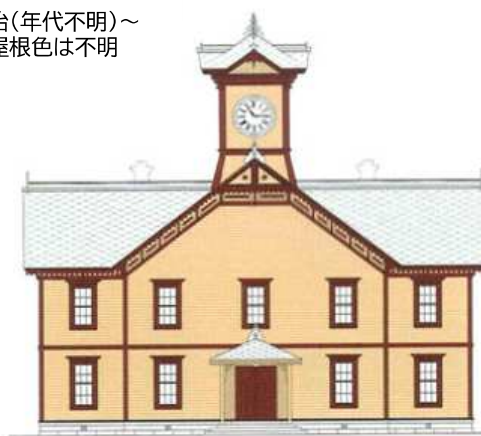
和暦	西暦	現在の名称					出典
		1階			2階		
		事務室	小展示室	大展示室	展示室 (ホール)	資料保管室 (倉庫)	
明治11	1878	英語および精神科学(教室)	農学および植物学(教室)	鉱物学・地質学と植物学(標本)棚(室)農学(標本)室	演武場	武器庫	ホイラーの表した略平面図
		英語学・数学初歩 および理学(教場)	農学および博物学(講堂)	博物場	演武場	武庫・体操機械場	『札幌農学校第2年報』
明治12	1879	博物科縦覧所、工業室、講堂			兵学科操練室	武器室	『札幌農学校第3年報』
明治18	1885	博物場 諸科教場			操練場	武器室	『開拓使事業報告第4編』
明治31	1898	植物学教室、動物学教室、農学教室、植物標品室、農具および種子標品室、教授室			演武場	植物病理学実験室	『札幌農学校』P70
昭和8	1933	新聞・雑誌閲覧室	事務室・書庫	閲覧室	集会場	控室	昭和8年改修指示図と思われる平面図
昭和23頃	1948頃	婦人閲覧室 下足場	事務・書庫	閲覧室	集会場	控室	時代不明の配置図(昭和24年の現状図とほぼ同じ)
昭和24	1949	会議室 下足場	事務室	子供・学生閲覧室	一般閲覧室	展示室	昭和24 年改修指示平面図
昭和25	1950	事務室	児童室	新聞雑誌室兼学習室	一般閲覧室		『さっぽろ文庫』P269
昭和32	1957	-	新聞雑誌・郷土資料閲覧室	書架室	閲覧室		『さっぽろ文庫』P271
昭和42	1967	新聞・雑誌閲覧室 下足場	事務室・書庫	閲覧室	集会室	控室	昭和42 年改修前平面図
昭和51	1978	-	-	-	時計台資料室		『さっぽろ文庫』P279・282

< 外壁塗装色の変遷 >

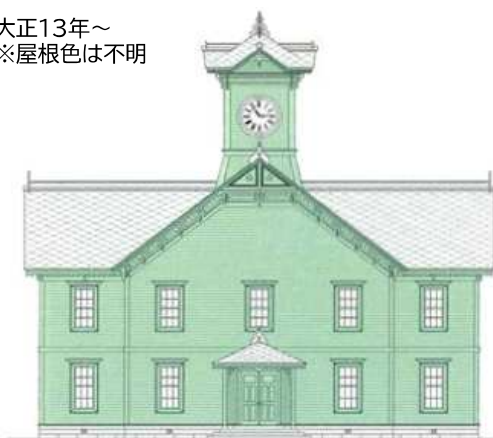
当初(明治14年)
※屋根は桧葺き



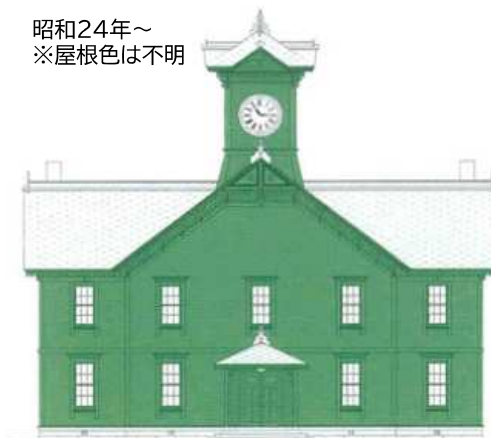
明治(年代不明)～
※屋根色は不明



大正13年～
※屋根色は不明



昭和24年～
※屋根色は不明



昭和28年～現在



図8 時計台外壁の塗装色の変遷

(4) 主な改造時期とその内容

時計台は、明治11年の創建から現在まで、様々な改修や修理が行われてきた。時計台の竣工から札幌市の有形文化財に指定されるまでの間に行われた主な改変の履歴を「重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書／札幌市(平成10年9月)」にもとづき以下に整理する。

表4 時計台の改変の履歴

和暦	西暦	月日	改修・修理等の履歴	備考
明治11	1878	10月 16日	開業式	
明治14	1881	不明	塔屋を廃して時計塔を建ち上げる	
明治18	1885	不明	腐朽した土台の木材を石材にて修理	
明治39	1906	不明	現在地に曳家・移築し、以下の改装を実施 1. 基礎を軟石上に煉瓦五段積みの形式に変更 2. 一階の床高さを変更 3. 階段を南側に移設し、階段幅を縮め、手摺形式や周囲の間仕切りを変更 4. 煙突を除去 5. 一階小展示室に独立柱を建てた	
明治42 ～44	1909 ～ 1911		屋根を葺葺から金属板菱葺に改修 ※古写真より、明治42年までは葺葺であることが確実。明治44年5月29日の写真では金属板の菱葺に変化。 ※このときの金属板葺材は残存しておらず、どのような金属であったかは不明。	
大正13	1924	5月	以下の改修を実施(費用4,000円) 1. 東階段室を増設(これにより、東面南側の上下窓は1・2階とも廃されて出入口に変化) 2. 背面妻側中央部に上下窓を開く 3. 二階に蒲鉾型天井を設置 4. 外壁の塗装を塗替え	
昭和8	1933		以下の改修を実施(費用6,500円、着手6月6日、完了8月6日) 1. すべての上げ下げ窓を約10cm高め、窓額縁を取替え、それまで縦額縁と下額縁を留に納めていたものを、縦額縁を伸ばす形式に変更。2階は主屋・翼屋とも平側の窓笠木が取り除かれた 2. 基礎・土台修理および柱の根継ぎ 3. 1階の独立柱を化粧板で被覆 4. 1階の床板を張替え 5. 1・2階翼屋の間仕切りを変更 6. 時計塔2階の東側に明かり取り窓を設置 7. 各部屋の出入口扉にガラスを嵌めた 8. 2階ホール中央の電灯をシャンデリアとした 9. 玄関ホールの床をコンクリート土間に変更 10. 軒飾・妻飾の一部を取替え 11. 屋根を葺葺、雪の沁り止めを設置 12. 北側に管理人住宅(北側付属屋)を新設	昭和6年に札幌市教育会の創立25周年記念事業として企画され、昭和8年に実施

和暦	西暦	月日	改修・修理等の履歴	備考
昭和24	1949		以下の改修を実施(費用3,173千円) 「時計台模様替工事」「時計台追加修繕工事」「時計台塗装工事」の3工事に分割して発注。 1. 本屋北面の上げ下げ窓を、1・2階とも西端を除き欄間付きの引違連窓に変更 2. 間仕切りの変更 3. 2階蒲鉾型天井の下に格縁天井を設置 4. 本屋北側西寄りの1本を除き、煉瓦造の煙突を新設 5. 外壁の塗装を濃緑色に塗替え	市立札幌図書館開館準備としての工事
昭和25	1950	3月	「時計台時計室内部模様替工事」(費用53,300円) 時計分解清掃も含む	
		12月	「時計台灰捨場新設工事」(費用10,780円) 灰捨場の新設	
昭和26	1951	6月	「図書館梯子製作新設工事」(費用12,500円) 40尺鉄製梯子の製作	
		10月	「市立図書館集合煙突改良工事」(費用12,000円) 煙突継足	
昭和27	1952	8月	「市立図書館書庫照明器具取換その他工事」(費用76,800円) 蛍光灯の取替え	
昭和28	1953	8月	「市立図書館塗装工事」(費用565,400円) 外部の全面塗装	
昭和29	1954	2月	「市立図書館補強工事」(費用21,500円) 事務室の2階梁補強	
		3月	「市立図書館蛍光灯増設工事」(費用9,500円) 蛍光灯の増設	
昭和31	1956	8月	「図書館集合煙突修理工事」(費用42,800円) 防火改修	
		不明	玄関ポーチに囲いを施す	
昭和33	1958	5月	「市立図書館整備工事」(費用1,380,000円) 外部の塗装、外柵改修、植樹	
		10月	屋根(亜鉛引鉄板菱葺)の大規模修理 1. 南側屋根補修(鉄板葺替(破損取替約100㎡)) 2. 腐食部分葺替(約60㎡) 3. 腐食部分野地板取替え(t30約30㎡) 4. 防錆ペイント塗り(トタン取替部分)	
昭和34	1959	6月	「市立図書館電気設備改修工事」(費用775,000円) 電気設備の全面改修	
		6月	「市立図書館電気塗装工事」(費用425,000円) 内部の塗装	
		8月	「市立図書館物置石炭庫改築工事」(費用230,000円) 物置・石炭庫の改築	
		8月	1. 事務室梁の補強(事務室の梁に方杖取付け、鉄柱建て1か所(細い方)、床不陸均し) 2. 裏階段室(東階段室)に書庫書棚を新設	
昭和35	1960	8月	1. 1・2階床フローリング取替補修 2. 2階腰羽目補修(間仕切部分)	
		9月	管理人室便所改造(大小便所を現在の状態に模様替え)	
		9月	東側便所改造(東階段室に存在した便所の模様替え)	
昭和36	1961	6月	(札幌市指定有形文化財に指定)	

1) 時計台の平面構成の変遷

時計台は、時代とともにその平面構成(部屋割り)が変化しており、それらの変遷を各時代の平面図とともに以下に整理する。

① ホイラーの表した略平面図

明治11年1月2日に、札幌農学校の教頭代理であったウィリアム・ホイラーが作成し、開拓使に提出した「札幌農学校演武場図案」である。

ホイラーの当初の構想では、煉瓦造の二階建てで塔屋を備えた「本館」と、木造で平家建の「練武館」(練兵館)の2棟の建設を要望していたが、後にこれを1棟に集約して以下のような平面構成に至ったと言われている。

1階には、英語および精神科学の教室、農学および植物学の教室、鉱物学・地質学・植物学の標本棚室、農学標本室などを配し、2階には、演武場と武器庫が計画されている。現存する東側階段室は、当初存在していなかったことなどがわかる。

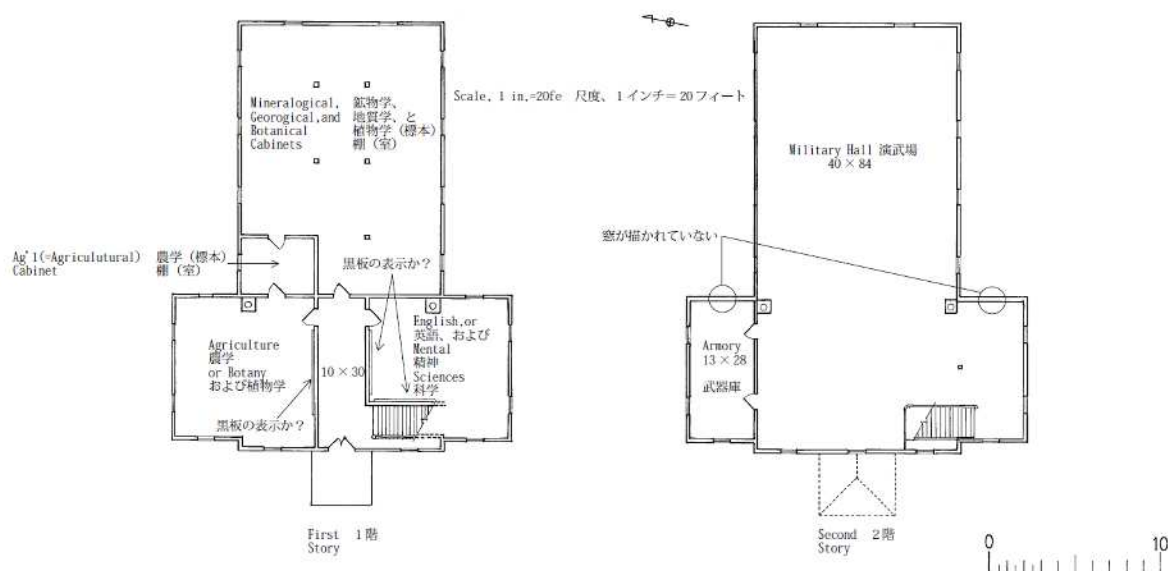


図9 ホイラーの表した略平面図

(出典:「重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書」/札幌市(平成10年9月))

② 竣工当時の平面

時計台で開業式が行われた明治11年10月16日当時の平面であり、「明治十一年 部下達書 録 公文課」(北海道立文書館蔵)に綴られた「札幌農学校所属演武場開業式」と題された書類の添付図および、「(明治)十五年 札幌農学校引継書 管理局」(北海道立文書館蔵)に綴られた図面を元に作成された。

実施設計にあたる作業は開拓使工業局営繕課が行ったものといわれている。基本的にはホイラーの描いた略平面図に則った平面構成になっているが、1階の現事務室の東側には、ホイラーの略平面図には存在しなかった小部屋が存在したことが明らかになっている。H7～10年の保存修理工事の際の解体調査による考察では、この小部屋は建築途中で急遽部屋を作ることが決まったものと考えられている。

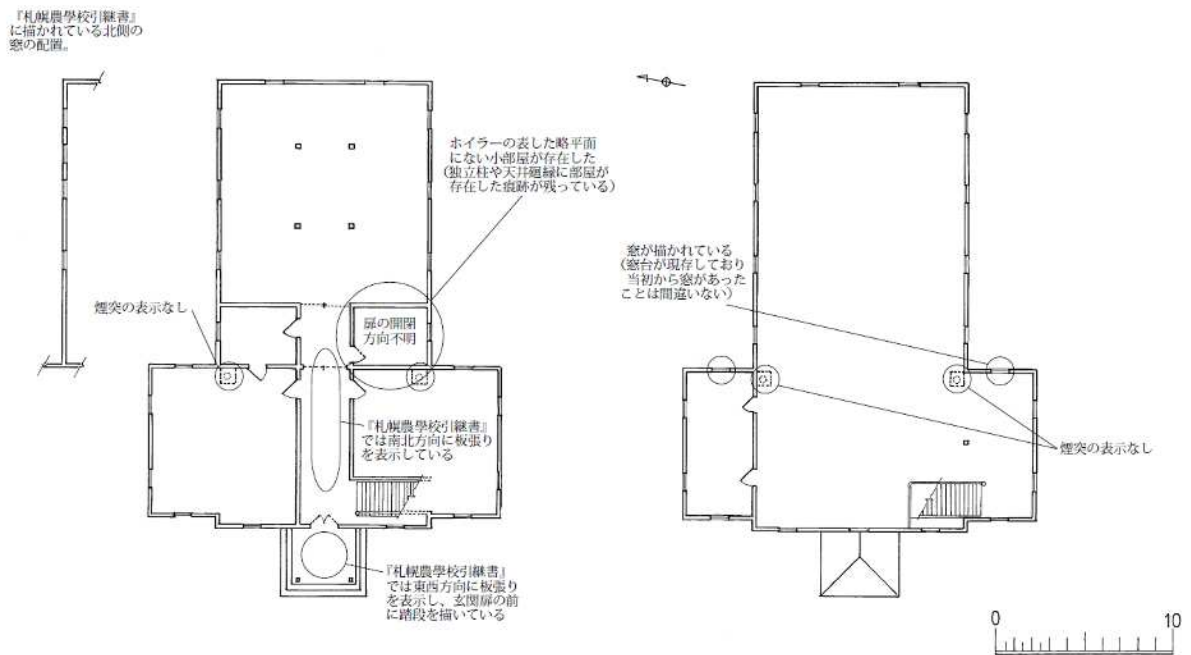


図10 竣工当時の平面

(出典:「重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書」/札幌市(平成10年9月))

③ 明治13年(1880年)ごろの平面

明治13年に札幌農学校を卒業した、佐藤昌介氏の座談会「時計台を語る」における発言を元に作図されたのが、以下の平面である。

＜佐藤昌介氏の発言内容＞

1階は、正面玄関を入れて中央廊下の右側と左側に教室がひとつずつあり、続いてそれぞれ準備室が左右にひとつずつ存在していた。中央廊下の突き当たりが博物標本の部屋となっていた。これは後に左右に2つに分けられ、北側は農具室、南側は標本室となったようである。また、2階は雨中体操場として使用しており、陸軍士官学校第1期卒業生の少尉が教官として赴任し、兵式体操を行っていた。北側の小部屋は当時武器室として使っていた。

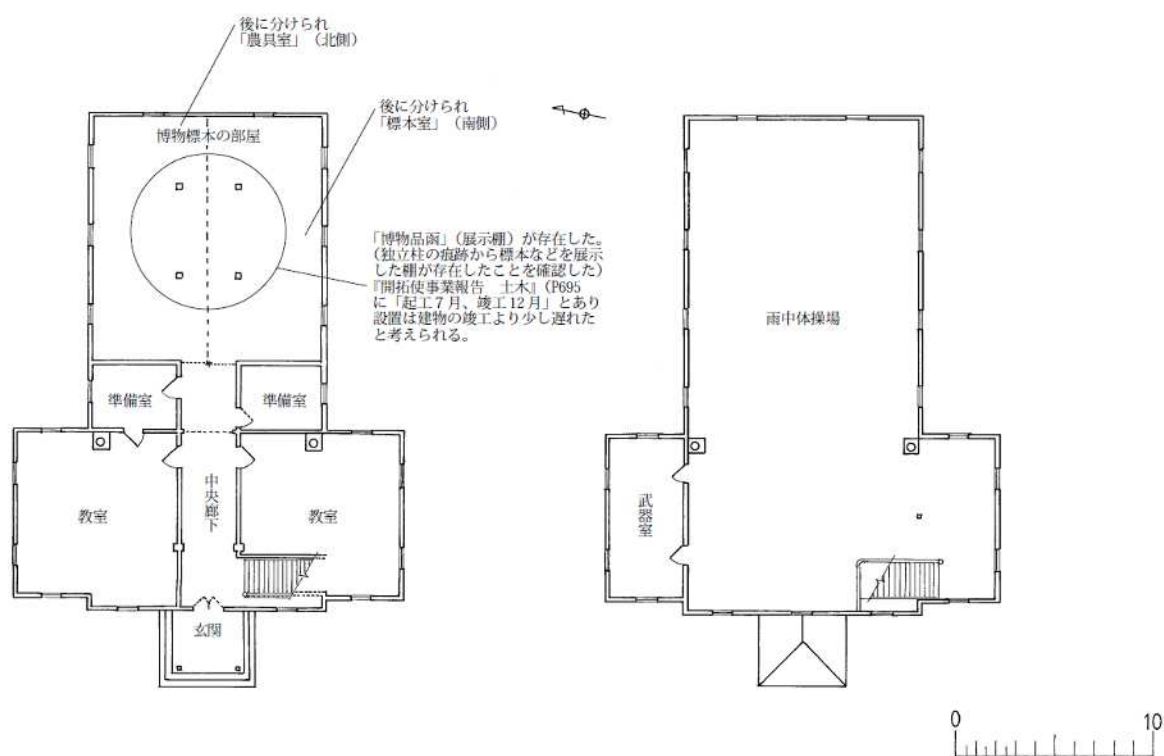


図11 明治13年(1880年)ごろの平面

(出典:「重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書」/札幌市(平成10年9月))

④ 時計塔を建ち上げた当時の平面

時計台が時計塔を建ち上げた明治14年当時の平面である。工事の着手と完了の時期は史料により記述が異なり、正確な月日は分かっていない。

これまでと大きな平面構成に変化はないが、1・2階ともに、時計塔を支えるための柱の存在が伺える。

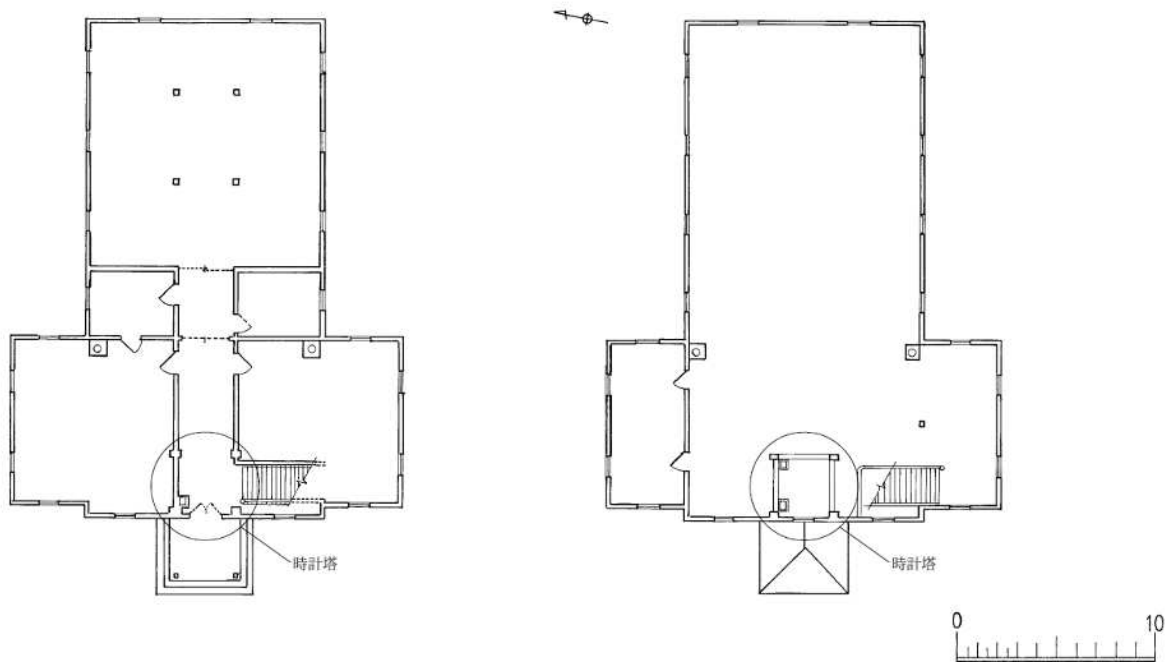


図12 時計塔を建ち上げた当時の平面

(出典:「重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書」／札幌市(平成10年9月))

⑤ 明治20年代中頃～30年代中頃の平面

高岡熊雄氏(明治28年札幌農学校卒業)、平塚直次氏(明治29年同校卒業)、半沢洵氏(明治34年同校卒業)による座談会「時計台を語る」における発言、柳内耕三氏(明治37年林実卒業)の「時計台80周年記念回顧座談会」における発言、および明治31年6月26日発行の「札幌農学校」の記述などを元に作図されたのが、以下の平面である。

この頃には、1階を、植物学教室、動物学教室、農学教室、植物標品室、農具および種子標品室、教授室として使用しており、経済の研究室・演習室として使用されていた部屋では、新渡戸稲造が教鞭をふるっていた。2階は、演武場と植物病理学実験室として使用しており、実験室では菌類の培養が行われていた。

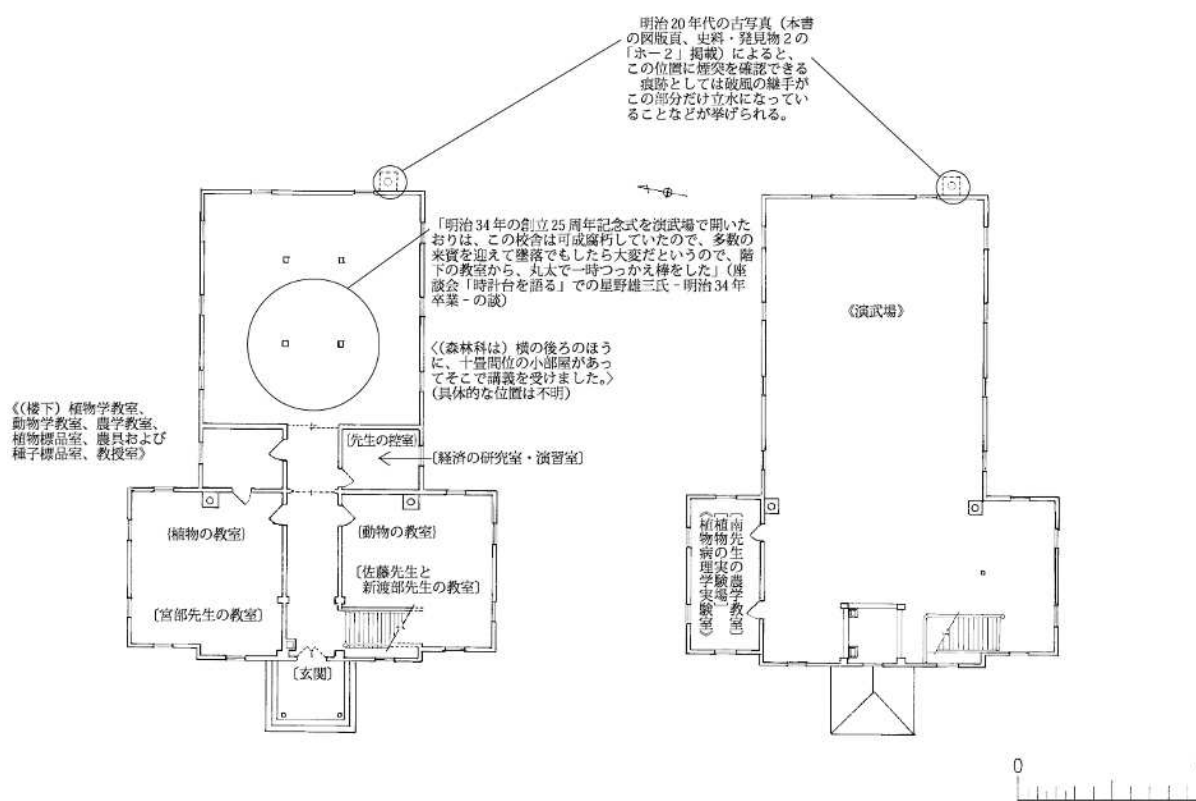


図13 明治20年代中頃～30年代中頃の平面

(重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書／札幌市(平成10年9月)より抜粋。

高岡熊雄氏の発言…[]で括る

平塚直次氏の発言…[]で括る

半沢洵氏の発言…{}で括る

柳内耕三氏の発言…〈〉で括る

明治31.06.26発行「札幌農学校」の記述…《》で括る

⑥ 曳家により移築した当時の平面

明治39年に現在の位置に曳家により移築されてきた当時の平面である。

明治36年7月に札幌農学校が現在の北海道大学の位置へと移転したことで、時計台の建物と土地は当時の札幌区が借用することになり、この借用期間を経て、明治39年には札幌区が時計台の建物を買収し、道路整備のため、現在の位置に曳家により移築されてきた。

この時、以下の改修が行われている。

1. 基礎を軟石上に煉瓦五段積みの形式に変更。
2. 1階の床高さを変更。
3. 階段を南側に移設し、階段幅を縮め、手摺形式や周囲の間仕切りを変更。
4. 2か所の煙突を除去
5. 1階の小展示室には独立柱を建てている。

1～4は昭和42年の工事報告書の記述による。5は平成7～10年の保存修理工事での解体調査で判明事項による。なお、階段を南側に移設したことは平面図では昭和8年の平面図には表れていない。

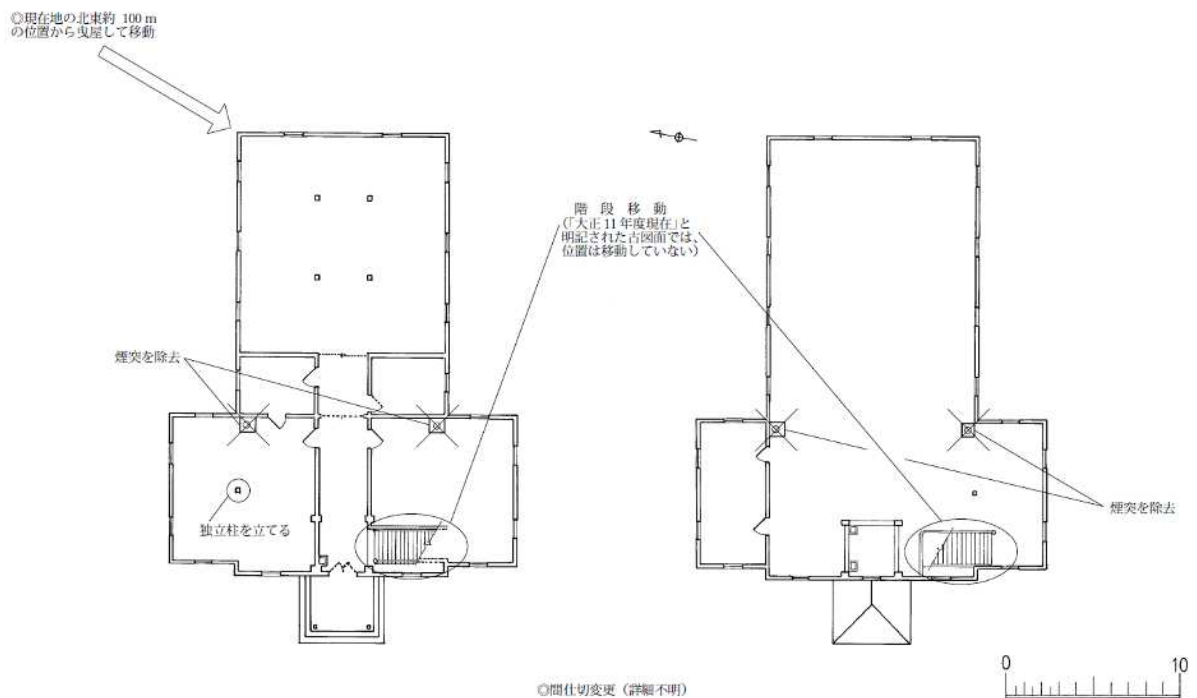


図14 曳家・移築した当時の平面

(重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書／札幌市(平成10年9月)より抜粋)

⑦ 明治40～43年(1907～1910年)の平面

明治40～43年に郵便局が一時使用していた際の平面である。明治41年(1908年)及び明治42年の古写真を基に作図された。

建物の周囲には屋根窓付きの下屋が増設されていたことが伺える。また、後に管理人住宅等として使用される北側付属屋もこの頃の建設である可能性が高い。

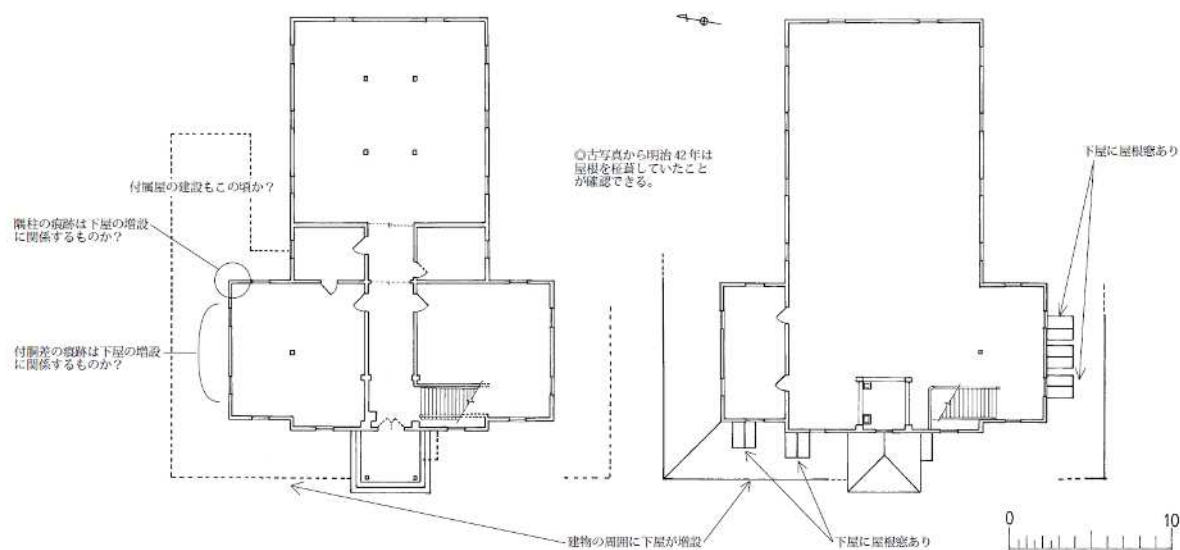


図15 明治40～43年(1907～1910年)の平面
(重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書／札幌市(平成10年9月)より抜粋)

⑧ 明治39年(1906年)～大正13年(1924年)頃の配置図

東階段室が描かれていないことで時代判定した古図面(配置図)により作図された、明治39年～大正13年頃の配置図である。

古図面には北側付属屋の書き込みがみられ、この頃には付属屋が存在していたことが伺える。また、東側には、本屋・付属屋とは筆跡や筆記具が異なる物置や車庫の表示があり、別の大正9年(1920年)頃の古写真には、本屋の東側に物置らしい建物が写っていることから、物置や車庫がこの期間内に増設された可能性が伺える。

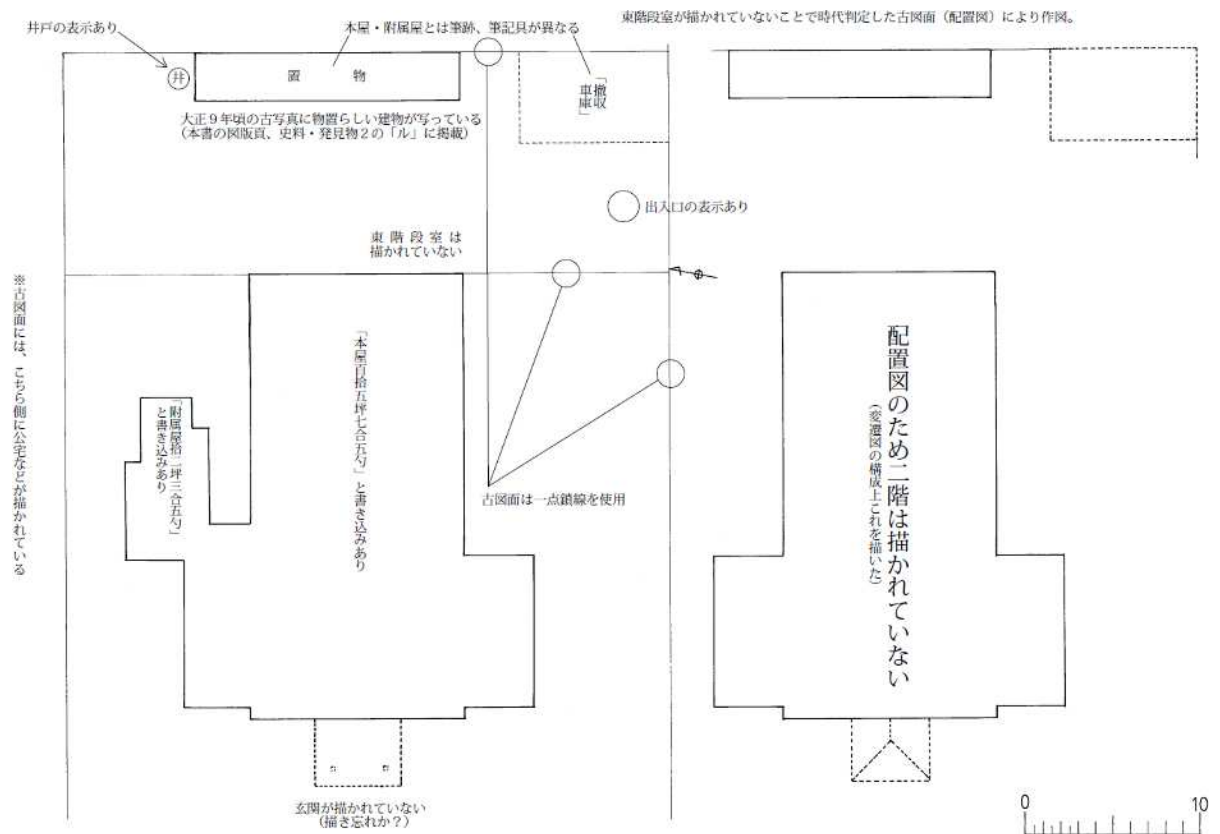


図16 明治39(1906年)～大正13年(1924年)頃の配置図

(重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書／札幌市(平成10年9月)より抜粋)

⑨ 大正11年(1922年)頃の平面

「大正11年度現在」と明記された古図面を元に作図された、大正11年頃の平面である。(※古図面は壁面を単線で描いており開口部は不明。下図は他の平面図との関係から壁厚を持たせて描かれている)

この古図面には、大正13年の改修で増設された東側階段室が描かれているほか、1・2階ともこれまでとは異なる部屋割りや間仕切りが記され、付属屋の部屋割りも記されている。この古図面が、後の改修に向けた計画図のようなものであった可能性も考えられる。

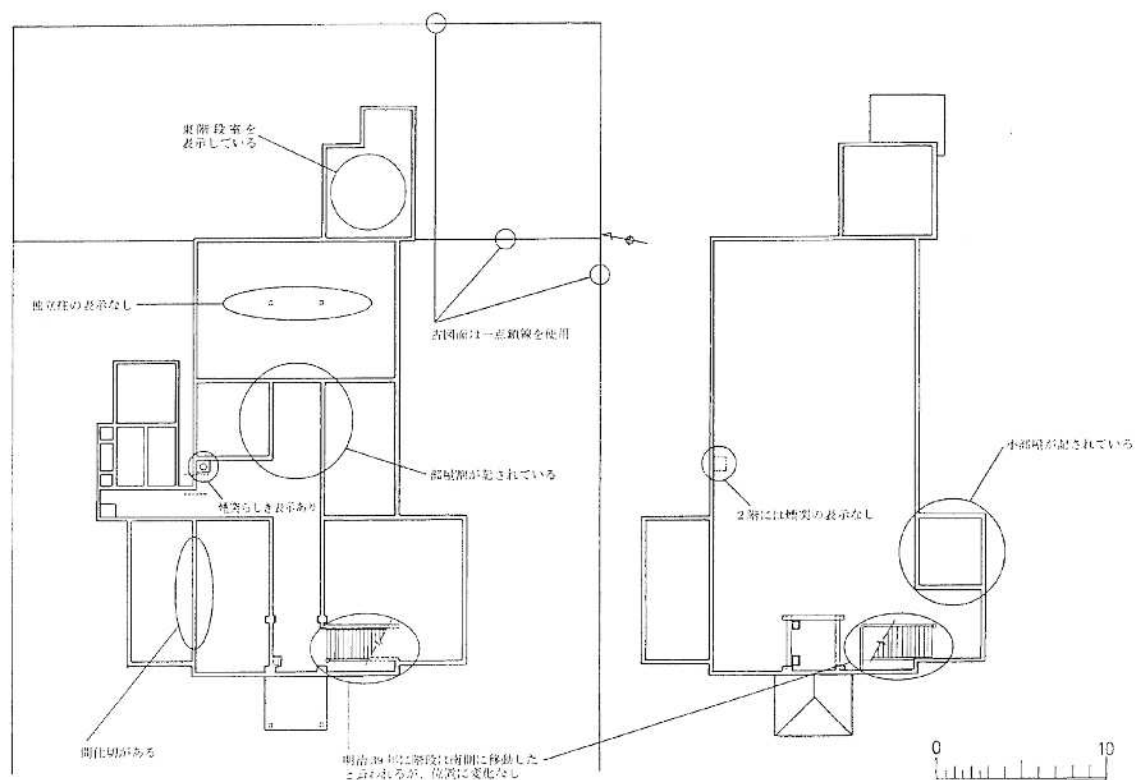


図17 大正11年(1922年)頃の平面

(重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書／札幌市(平成10年9月)より抜粋)

⑩ 昭和8年(1933年)頃の平面

昭和8年の改修指示図と思われる古図面を元に作図された平面である。。

この改修は、昭和6年に札幌市教育会の創立25周年記念事業として企画され、1・2階の翼屋の間仕切りを変更したほか、北側付属屋を管理人住宅として整備した。また、敷地内北側には石炭庫や物置が新設された。

玄関脇の階段が南側に移動していることが確認できるが、階段の移動がこの改修で行われたかどうかは確認されていない。

部屋名は、明治44年から教育会が運営していた図書館のもので、1階は新聞・雑誌閲覧室、事務室・書庫、閲覧室として、2階は集会場と控室として使用されていた。

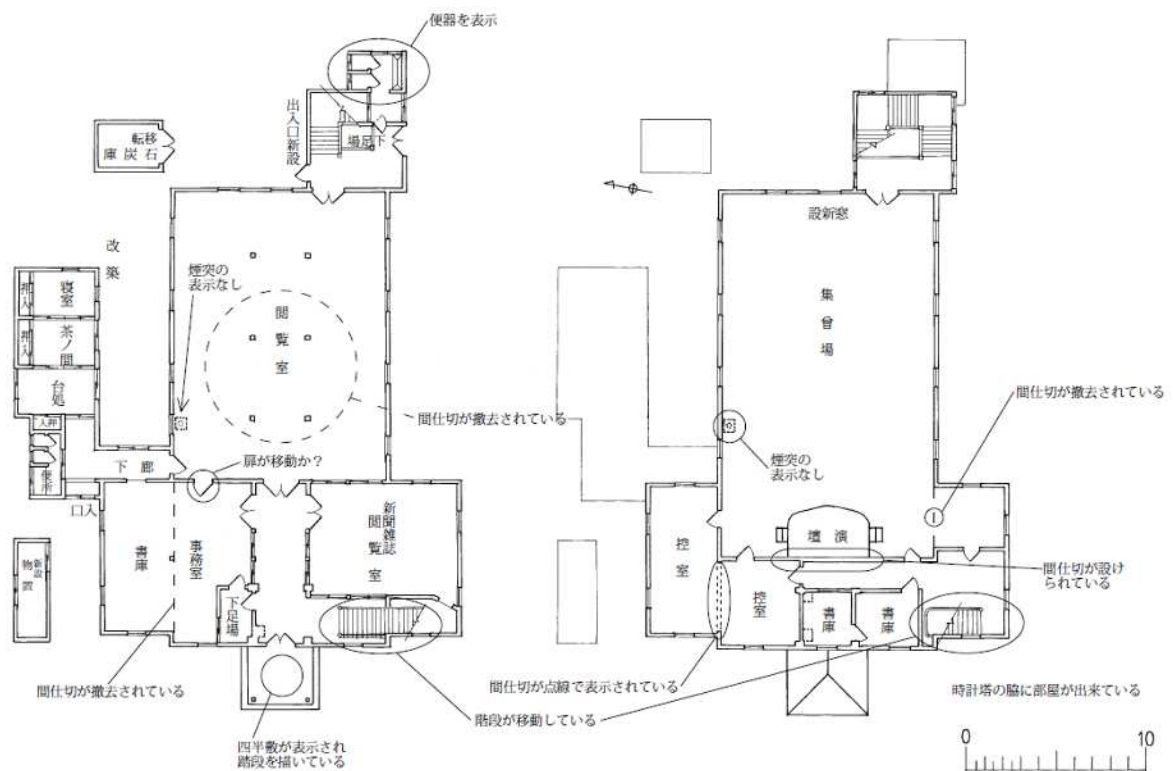


図18 昭和8年(1933年)頃の平面

(重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)保存修理工事報告書／札幌市(平成10年9月)より抜粋)